

3章 語り継ぎたい山形の人



最上義光騎馬像（霞城公園内）

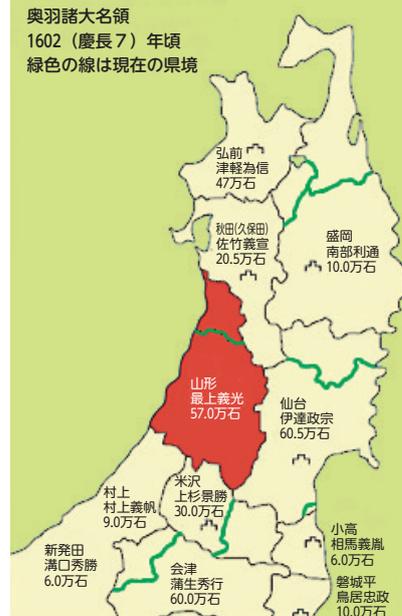


山形城三の丸東大手門



最上家が城諸家中町割圖による三の丸CG合成 山形城

奥羽諸大名領
1602（慶長7）年頃
緑色の線は現在の県境



山形57万石の領土図

1 山形の産業・くらしの土台を築いた人

(1) 山形県の産業・経済の土台を作った最上義光

最上義光は、今から400年以上前の戦国時代に、山形を愛し、人を愛し、出羽国に平和と安定をもたらし、現在の山形の基礎を築きました。城下町や最上川交通路を整備し、庄内平野を開発するとともに、領内各地に優れた文化を移入するなど山形の発展に大きく貢献しました。

義光は、羽州街道沿いに、七日町、十日町などの市日町、職人町をつくり、近江商人をはじめ外来商人の自由貿易を積極的に進め、その繁栄ぶりは東北最大とも言われていました。町づくりも、町人の経済活動・商工業が重視された巧みな城下町であったと言われています。山形藩は最上氏改易後も商業は大いに発展して江戸時代の山形を支える商業都市として繁栄しました。

義光は山形全体の経済の発展のために、内陸と庄内の交流を盛んにするとともに日本海を通じて領内の経済と文化を全国に結びつけました。その一つが、村山から大石田までの最上川「三難所」（碁点・三ヶ瀬・隼）開削工事でした。本格的な整備が図られ、最上川舟運は交易の大動脈になっていきました。最上川舟運の開発で、上方との物資の交流は飛躍的に発展し、全国でも良質の染料として人気のあった「最上紅花」をはじめ、山形地方の特産である「青芋、米、大豆、小豆」などを上方に運び、上方からは、「木綿、塩、砂糖、お茶、小間物」などを運んできました。また、内陸と庄内を結ぶ「六十里越街道」や新庄から庄内にぬける道路（現国道47号線）の改修や、大堰をつくらせ、荒地だった庄内平野の新田開発を進めました。

コラム 18

大きな権力の象徴「金箔瓦」

山形城の発掘調査で、当時中央政権の意向が働き、特に認められた大名にのみ使用が許可された大きな権力を象徴する「金箔瓦」が発見されています。「金箔瓦」は織田信長が安土城で初めて使用し、その権力を受け継いだ豊臣秀吉が大坂城や肥前名護屋城などで用いられていました。最上義光は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、肥前名護屋城に在陣していますが、この時秀吉の築城した新しい城に影響を受けたと考えられます。

義光が三の丸まで拡がる広大な城の拡張工事を行ったのは、庄内や秋田県沿岸南部まで収め、57万石と言われる領国を獲得する1600年関ヶ原合戦以降だと考えられています。

「金箔瓦」もこの時に使用されたと推測されます。

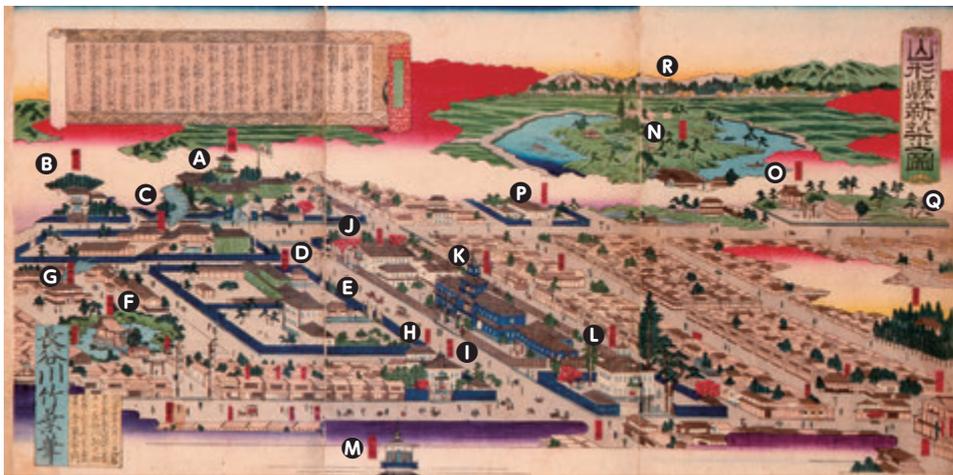


出土した「金箔瓦」
(山形市教育委員会所蔵)

最上義光の偉業



- ① 57万石を領する大名で東日本随一の山形城の建築
- ② 城下町での初市、植木市などを勧め商業の活性化を図る
- ③ 最上川の三難所（碁点・三ヶ瀬・隼）の開削、酒田港の改修による舟運で上方文化の移入に努力
- ④ 北館大学に命じ北楯大堰を作り庄内平野を大穀倉地帯に
- ⑤ 庄内と新庄、庄内と村山を結ぶ道路の改修
- ⑥ 紅花栽培を奨励



山形県新築の図（長谷川竹葉筆・山形美術館所蔵）

「山形県新築の図」に見える建物

※（ ）は平成25年現在の建物

- A 初代山形県庁（文翔館）
- B 織文社（旧山形県会議事堂）
- C 山形県勤業製糸場（山形地方裁判所）
- D 山形県勤業博物館（山形市役所）
- E 南村山郡役所（山形市役所）
- F 湯殿山神社（山形市役所）
- G 器機ノ湯（山形市役所）
- H 活版所（民間ビル）
- I 山形警察署（民間ビル）
- J 南山学校（やまぎんホール）
- K 山形県師範学校（山形県JA・山形商工会議所）
- L 山形県警察本部（山形銀行本店）
- M 済生館・現郷土館（山形市立病院済生館）
- N 千歳園（山形東高周辺）
- O 三島神社（三島神社）
- P 山形県水力機織場（遊学館西）
- Q 馬見ヶ崎湖畔（教育資料館）
- R 国分寺薬師堂（国分寺薬師堂）



首都東京に向かう表玄関
栗子隧道（米沢市）



山形を太平洋に結んだ新道
関山隧道（東根市）



米沢から越後へ、峠の難所を拓く
片桐門（小国町） ※立入禁止区間



川口の眼鏡橋
堅磐橋（上市市）

（2）山形県の近代化を進めた三島通庸

三島通庸は東京府参事から教部省の教部大丞を経て、1874（明治7）年に酒田県令として赴任し、1876（明治9）年に初代山形県令となりました。三島通庸が山形で過ごしたのは、1874（明治7）年から1982（明治15）年までの9年間です。

三島通庸は山形県令に就任する際に、内務卿・大久保利通に県政運営の抱負を次のように述べています。

- ①道路を開き、運輸の便利を良くし、民力を養い、県民の目を広く外の世界へ開かせること。
- ②学校をつくり、人材養成に努めること。
- ③勤業、なかんづく製糸器械場を設け、博物館を開いて実物による教育を施すこと。
- ④病院を設立し、県民の健康維持を図るとともに医学教育も行うこと。
- ⑤警察署とその分署を設置するなど、治安機構の確立を図ること。
- ⑥河川を改修し、これを運輸の動脈として利用促進すること。
- ⑦酒田港の改修を行うこと。（幕内満雄著「評伝三島通庸」より）

これらの方針に基づき、各地で近代化事業を進めました。

特に栗子峠等のトンネル工事には力を入れ、堅い岩を開削するための当時アメリカでも3台しかなかったトンネルを掘る機械を、高いお金を出して買いました。もちろん、日本では初めて使われた機械です。

1880（明治13）年10月19日の午前1時の真夜中、「（栗子峠の）トンネルが抜けたぞ。」という知らせに、三島県令はすぐに飛び起き、現場に駆けつけ、作業していた人達と涙を流して喜んだということです。

三島通庸の偉業



- ①県庁を中心に県都山形にふさわしい新市街地の建設
- ②地方郡役所などの建築（擬洋風建築）
- ③山形県と他県を結ぶ新道開削（トンネルや橋）
- ④製紙工場や新農業（さくらんぼ等）等の殖産興業
- ⑤済生館病院の建設と医療・医学の振興
- ⑥山形県師範学校の建設と教育の推進

コラム 19

イザベラ・バードが見た県都山形

1878（明治11）年、イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが、東北旅行で現在の山形市に7月中旬に到着し、その印象を「日本奥地紀行（1880年初版）」のなかで、「大通りの奥の正面に堂々たる県庁があるので、日本の都会には珍しく重量感がある。」「政府の建物はふつう見られる混合の様式であるが、ベランダをつけたしているので見栄えがする。県庁、裁判所そして進歩した附属学校を持つ師範学校、それから警察署はいずれも立派な道路と町の繁栄にふさわしく調和している。大きな二階建ての病院は、丸屋根があって、150人の患者を収容する予定で、やがて医学校になることになっているが、ほとんど完成している。非常にりっぱな設備で換気もよい。」と紹介しています。



山形市街図（高橋由一画）明治初期



北館大学助利長像（楯山公園） 北楯大堰利用図



北楯大堰

(3) 荒れ地を豊かな大地に変えた北館大学助利長～北楯大堰～

今から400年前、広大な庄内平野は最上川の水位が低く、作物の育たない原野となっていました。1601（慶長6）年に最上義光から狩川城主として任命された北館大学助利長が、水利に恵まれずに困窮する人々をなんとかしようと、月山を水源とする立谷沢川からの導水を計画しました。1612（慶長17）年3月に堰の開削工事に着手、難工事の末、同年7月に延長10kmを超える北楯大堰が完成しました。その後、3年をかけて整備し、総延長は32kmに及び、狩川から余目、酒田の5,000ha余りの水田を潤し、米どころ庄内平野の基礎を作りました。

逸話として、開削工事が最も困難な箇所に差し掛かった時、最上川が氾濫し、法面が崩れて工事が進められずにいると、北館大学公は自分の馬の鞍を最上川の淵に投げ入れて川を鎮め、それ以降、順調に工事が進められたと語り継がれており、「青鞍之淵」として石碑が建てられています。この北館大学公の功績を称えて「北館水神社」が建立され、現在の「北館神社」となり、今も庄内平野を見守り続けています。

コラム 20

多くの人の努力で作られた砂防林「クロマツ林」

毎年11月、遊佐町立藤崎小学校の体育館では、植林事業に生涯を捧げた佐藤藤蔵の偉業を讃える「藤蔵祭」が開かれます。

藤蔵は、砂丘地にクロマツを植林するため、風を防ぐ巨大な垣を作り、砂丘の土壌を改善するための「ネムノキを植えること」を編み出した人であり、現代の植林事業に広く用いられています。

佐藤藤蔵や本間光丘の他にも、最上川以北の砂丘地植林先駆者の来生彦左衛門、最上川以南の砂丘地植林先駆者の佐藤太郎右衛門、遊佐町菅里地区の植林を進めた曾根原六蔵、戦後の海岸砂防の父と言われた富樫兼治郎など多くの人の努力で砂丘地植林が行われました。



佐藤藤蔵翁時代の植林風景（佐藤家所蔵）



庄内砂丘の砂防林風景



庄内砂丘砂防林マップ（「身近な松原散策ガイド」より）

(4) 砂嵐から大地の恵みを守った本間光丘



本間光丘（東北芸術工科大学所蔵）

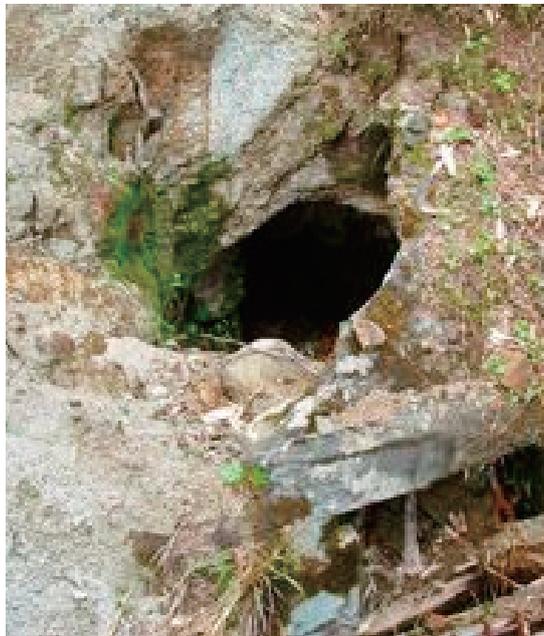
本間光丘は、「天下第一の豪農」として、庄内藩14万石の領内において24万石の大地主であり、「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」とうたわれた羽後酒田の本間家中興の祖と言われる人物です。

酒田では1729（享保14）年頃から植林が始められましたが成功せず、町民の依頼に応じて本間家二代目光寿が植林に取り組みました。光寿は1754（宝暦4）年に没し、三代目光丘が植林を継承します。光丘の手法は数十万個の砂囊による人工砂丘築造、グミやネムを植えてから、能登（石川県）から取り寄せたクロマツを植林するという現代の砂丘地植林技術に通じるもので、幾多の困難がありながらも卓越した実践力と財力により、植林を成功させました。1918（大正7）年には、光丘の功績をたたえて植林地の地名を「長坂」から「光ヶ丘」に改称され、現在も「光ヶ丘松林」として市民に親しまれています。

光丘は、地域全体が自らの経済活動の基盤であることを知り抜き、その整備活性化こそが一族の繁栄をも支えていくと考えた人です。



米沢藩士黒井半四郎
(米沢市上杉博物館所蔵)



飯豊山穴堰



黒井堰風景



飯豊山穴堰マップ

(5) 奇跡の堰「飯豊山穴堰」を作った

黒井半四郎

黒井堰は上堰と下堰からなり、堰の長さは合わせて約8里(32km)と大規模なものでした。このうち上堰は、米沢市窪田の千眼寺裏で松川(現在は最上川)の水を堰き上げ、糠野目で松川に樋を掛け水を渡し、高島・赤湯方面の水田をうるおしました。

この大工事を計画し、責任者となったのが、黒井半四郎忠寄くろい はんしろうただよりです。米沢藩の中級家臣団である五十騎組ごじゅうきぐみの出身で、幼いころから和算(算術)の勉強に励み、中西流和算の最高免許を受けました。その力が認められ、藩の財政を司る勘定頭かんじょうがしらに任命され、無駄な出費を削るなど、藩財政の改善につとめました。

また、黒井は奇跡の堰とも言われる「飯豊山穴堰あなげき」の工事も進めました。今から約200年前、小松、黒川方面(今の川西町)は、水不足で上杉藩の藩主上杉鷹山が黒井半四郎に命じて、飯豊山にトンネル(穴堰)を掘って、水量の多い玉川(小国町)の水を白川に流すという大工事をを行いました。トンネルは、標高約1,500mの山の中にあり硬い花崗岩でできています。当時の技術では難工事で、約20年かかって完成しました。

この穴堰は、近年まで川西町の田んぼに命の水を送っていましたが、現在はその役目を終えて、県指定文化財の史跡として保存されています。

コラム 21 蝦夷地探検家 最上徳内



「最上徳内肖像画」
最上徳内記念館所蔵

最上徳内もがみとくないは、村山市楯岡出身の北方領土探検家で日本で最初に択捉島えとろふどうを探検した人です。この時、ロシア人・イジュヨヅフに出会い、択捉島や、ウルップ島以北の知識を得ています。

下記の地図は、徳内自身の調査と、アイヌやロシア人から聞いた知識によって描かれたものです。徳内の地図では、千島列島の島々にロシア語の名称が記され、主要な島にはアイヌ語の地名が併記されています。



最上徳内「蝦夷国風俗人情之沙汰附図」(1790年)
北海道大学附属図書館・北方資料室所蔵



Let me introduce five people who laid the foundation for the industries and lifestyle of Yamagata:

The first person is Mogami Yoshiaki, the lord of Yamagata Castle. Mogami held an area of 570,000 *koku*, and laid the foundation for present-day Yamagata. He developed the castle town and the Mogami River transportation route, and spread the latest culture in the area. The second person is Mishima Michitsune, the first Prefectural Governor of Yamagata. Mishima carried out modernization projects such as town development, the digging of tunnels, and the building of bridges. The third person is Kitadatedaigaku-no-Suke Toshinaga, lord of the castle of Karikawa. He achieved the very difficult irrigation of the Shonai Plain with water from the Tachiyazawa River, and changed the Shonai Plain from a wasteland into rich rice paddies. The fourth person is Homma Mitsuoka, the third master of the Homma family. Homma was rich and practical, and planted a lot of trees to protect the natural resources of Sakata from sandstorms. The fifth person is Kuroi Hanshiro, a samurai of Yonezawa fief. He constructed dams, Kuroi-Zeki and Iidesan-Ana-Zeki, and made the firm ground of Okitama area into rich rice fields.



浜田広介



ココロノヤサシイ
 オノウチデス。
 ドナタデモ
 オイデクダサイ。
 オイシイオカシガ
 ゴザイマス。
 オチャモ
 ワカシテゴザイマス。



浜田広介記念館童話ルーム上演作品「泣いた赤おに」より

広介の心にあるまほろばの里高島の風景

2 郷里山形を愛した文学者たち

コラム 22

「道ばたの石」の詩碑

広介の子どものころまでは、道ばたに腰をおろせる「休み石」というものがあつたそうです。

重い荷を背中にしょっていく人が、ところどころで腰をおろして休めるようにしようとの、人間同士の心づかいの石だったのかもしれない。

広介の母校・高島町立屋代小学校の庭に、彼の詩を刻んだ記念碑があります。

道ばたの石はいい
 いつも青空の下にかがみ
 夜は星の花をながめ
 雨にぬれても風でかわく
 それにだいいち
 だれでも腰をかけてゆく



母校の屋代小に立つ「道ばたの石」の碑
(平成27年5月28日 山形新聞)

(1) 母の語りとふるさとの風土に育まれた「ひろすけ童話」

① 浜田広介と泣いた赤おに

『泣いた赤おに』は、^{はまだひろすけ}浜田広介(1893~1973年)の代表作と言われる児童文学であり、学校教科書にも採用され、道徳の題材にも多く使われています。

「ドコマデモ キミノ トモダチ」、これは、ラストに青おにから赤おにへ残した言葉です。浜田広介の童話は、相手を思いやる心と優しさに溢れており、子どもだけでなく、大人にも読まれ、愛されています。

浜田広介は、1893(明治26)年、山形県東置賜郡屋代村(現高島町)に農家の長男として生まれました。美しく、豊かな恵みを与えてくれる自然は、時に厳しくもあり、特に東北地方の冬は雪に閉ざされます。そんな冬の夜に、自宅の囲炉裏の火のそばで、幼い広介は、母や母方の祖母からいろんな昔話を聞き、それが後に文学を志す礎になったと言われています。

② 「ひろすけ童話」の世界

広介が童話を書くようになったのは、早稲田大学在学中にお伽話として応募した「黄金の稲束」という作品が入選したからです。当時のお伽話のほとんどは悪役が滅ぼされることが多かったのですが、「黄金の稲束」には悪役は出てきません。老いた馬をいたわる百姓が、その思いやりの結果として、三頭の若駒^{わかこま}と黄金の稲束に恵まれるという善意の話です。

広介は、その後、コドモ社の雑誌「良友」(1916(大正5)年創刊)に誘われて童話を書くようになりました。1918(大正7)年の7、8月号には、『呼子鳥』を、翌年の1月号には、『椋鳥の夢』を発表しました。『呼子鳥』が哀しい母の視点から書かれた作品であるのに対し、『椋鳥の夢』は、いなくなった母を慕う椋鳥の子どもの視点から書かれています。どちらも、広介の子どもの頃の境遇を織り込んでおり、ひろすけ童話は作者の心情が込められています。

『泣いた赤おに』の作品に出てくる鬼や、『りゅうの目の涙』に出てくる龍は、本来、人々から恐れられ、嫌われた存在でありましたが、ひろすけ童話で、心やさしい、思いやりのある存在として登場します。広介は、社会的に弱い立場にある者に目を向け、その思いやりが童話に込められたと言われています。



蔵王を背に瀧山山頂に立つ茂吉(斎藤茂吉記念館提供)



最上川を見つめる茂吉(大石田町/昭和22年)
(撮影:佐々木勇 斎藤茂吉記念館提供)



晴れた冬の日の最上川(大石田町川前地区)

(2) 郷土の自然を、風土を精根込めて歌った斎藤茂吉

① 茂吉と蔵王

「陸奥をふたわけざまに^{そび}聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」これは、蔵王山頂の歌碑に刻まれている歌です。斎藤茂吉(1882~1953年)は14歳で上京し、晩年、1945(昭和20)年4月に戦争を避けて帰郷しました。1946(昭和21)年から約2年間、最上川のほとりの大石田に住みます。したがって、茂吉の文学は「蔵王を父に、最上川を母に」と言われます。しかし、蔵王のお釜(火口湖)を詠んだ「死にしづむ火山のうへにわが母の乳汁の色のみづ見ゆるかな」という歌もあることから蔵王を母なる山とする気持ちもあったと言われています。

② 茂吉と大石田

1893(明治26)年8月、正岡子規が松尾芭蕉を慕い「はて知らずの記」で立ち寄った大石田の地に、茂吉もまた、芭蕉を思慕して訪れたのが初めてで、その後も幾度か立ち寄り、また、戦後生活の場となりました。

大石田の住まいは、野鳥の音が聞こえることにちなんで命名した「聴禽書屋」に1947(昭和22)年11月まで滞在しました。聴禽書屋は、最上川からほど近く、芭蕉を懐かしむに好都合の環境でした。

茂吉が、山形の悠久たる自然とともに大石田の人々と触れ合う中、晩年の「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも」に代表される64歳から65歳にかけて詠んだ歌の数々は第16番目の歌集『白き山』に収録され、1949(昭和24)年に刊行されました。

コラム 23

「観光地百選」全国一位を祝う歌

「万国の人来り見よ雲はるる
蔵王の山のその全けきを」

これは、1950(昭和25)年、新聞社主催の「日本観光地百選」の山岳部門で、蔵王が全国第一位に選ばれたことを祝い、茂吉が詠んだ歌です。

上市市出身の歌人斎藤茂吉が蔵王を国内外に自慢したい思いが感じられる歌です。



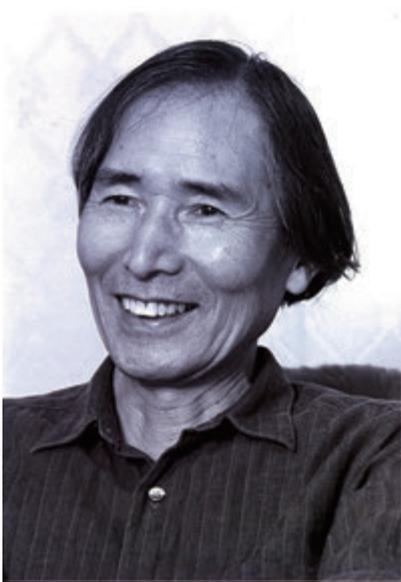
JR山形駅の壁面に設置されている
茂吉の銅板レリーフ



Yamagata has produced many men of letters. Among them, here are two who loved their home, Yamagata:

The first is Hamada Hirosuke, writer of children's stories, born in Takahata Town. Hamada wrote many stories such as *Naita Akaoni* (The Crying Red Ogre) and *Mukudori no Yume* (The Dream of a Gray Starling). The stories written by Hamada are full of sympathy and kindness, and are loved not only by children but also by adults.

The second is a *tanka* poet, Saito Mokichi, who came from Kaminoyama City. Saito loved the nature of his home, Yamagata, and put his affection for it into his *tanka* poems. He especially loved Mt. Zao as seen from his hometown, Kaminoyama City, and Oishida Town, where he was evacuated during World War II. He also loved the Mogami River, which flows through Oishida Town.



藤沢周平 (写真提供 文藝春秋)



記念館に移築再現している書斎の写真 (藤沢周平記念館提供)



教師時代ゆかりの地「湯田川温泉」



藤沢周平記念館 (藤沢周平記念館提供)



庄内藩居城鶴ヶ岡城址



金峯山から望む鶴岡市街地 (藤沢周平記念館提供)



海坂城下を流れる五間川のモデルとなった「内川」から望む金峯山 (藤沢周平記念館提供)

コラム 24

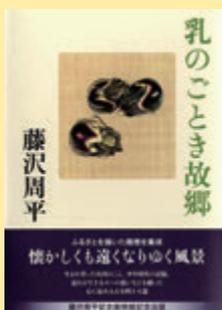
藤沢周平と故郷

『乳のごとき故郷』というエッセイ集の中で藤沢周平は故郷庄内への深い思いを綴っています。

藤沢周平は、山形師範学校を卒業後、郷里の中学校の教師となりましたが、病気のため教師を続けることができず、新たな職に就くために30歳で故郷をあとに上京します。

金峯山の麓に広がる庄内平野の、のどかな農村に生まれ育った藤沢周平は、終生、庄内への思いを抱き続けていたようです。藤沢文学に描かれた世界には、故郷の自然の中で遊び、家業の農業を手伝いながら成長した少年時代の体験が、映し出されているようです。

エッセイ集『乳のごとき故郷』は、自分の生まれ育った庄内のこと、少年時代の記憶、忘れがたき人々への思いなど、藤沢周平の愛してやまなかった庄内・鶴岡に関するエッセイを集めた作品です。



(3) 郷里鶴岡の面影を作品に記した藤沢周平

①海坂藩と鶴岡

鶴岡市出身の作家、藤沢周平 (1927～1997年) は、江戸時代を舞台に、庶民や下級武士の哀歓を描いた時代小説作品を多く残していますが、物語の舞台としてしばしば登場するのが、架空の藩『海坂藩』です。この藩のモデルについての藤沢さんの明言はなかったものの、藩や城下町、領国の風土の描写は、藤沢さんの出身地を治めた庄内藩とその城下町鶴岡がモチーフになっていると考えられています。唯一、海坂城下を流れる川としてしばしば登場する「五間川」については、藤沢さん自身鶴岡市内を流れる「内川」であると語っています。

鶴岡市では、藤沢周平作品に登場する城下町・鶴岡の面影など、藤沢作品ゆかりの地25カ所に、案内板を設置し、訪れる人を小説の舞台へと誘っています。また、鶴岡公園内にある「鶴岡市立藤沢周平記念館」では、藤沢文学に親しみ、鶴岡・庄内の豊かな自然と歴史ある文化に触れながら、藤沢周平の作品をさらに味わい深めていくことができます。

②山形県内を舞台とした作品

藤沢周平の時代小説『たそがれ清兵衛』『蟬しぐれ』などの作品は映画化され、多くの人に愛され、今もなお多くの読者に親しまれています。藤沢周平は、「海坂藩」のほか、「庄内藩」「米沢藩」「戸沢藩」や庄内など郷土山形を舞台とした作品も数多く書いています。また、エッセイ『半生の記』には、青年期まで過ごした鶴岡でのことや、山形師範学校に通っていた時の山形市での生活の様子も書いています。

庄内藩・庄内を舞台とした作品

『義民が駆ける』『回天の門』『長門守の陰謀』『又蔵の火』『ただ一撃』『証拠人』『龍を見た男』『春秋山伏記』『三年目』『夜が軋む』

米沢藩を舞台とした作品

『漆の実のみのる国』『密謀』『幻にあらず』『雲奔る 小説・雲井龍雄』『一夢の敗北』

戸沢藩を舞台とした作品 『上意改まる』



井上ひさし (撮影 落合高仁)



遅筆堂文庫山形館 (シベールアリーナ内)



井上ひさし直筆の「遅筆堂文庫堂則」



井上ひさしと座右の銘



遅筆堂文庫「本の樹」(川西町)

(4) 「遅筆堂文庫」に込めた井上ひさしの願い

「遅筆堂文庫は置賜盆地の中心にあり、置賜盆地はまた地球の中心に位す。我等はこの地球の中心より、人類の遺産であり先人の智恵の結晶でもある萬巻の書物を介して、宇宙の森羅萬象を觀察し、人情の機微を察知し、あげて個人の自由の確立と共同体の充実という二兎を追わんとす。個と全体との幸福なる共生を追求せんとする我等は彼の幼稚なる理想主義者のドン・キホーテと同じく嗤われるべきであるか。応、嗤わば嗤え、我等は日本のドン・キホーテたちである。町の有司、若人たちの盡力によりいまここに発足する当文庫は、有志の人びとの城砦、陣地、かくれ家、聖堂、そして憩いの館なり。我等は只今より書物の前に坐し、読書によって、過去を未来へ、よりよく繋げんと欲す。1987年8月敗戦記念日」

これは、1987(昭和62)年、川西町出身の作家・劇作家、井上ひさし(1934~2010年)が遅筆堂文庫開館にあたり自ら書いた「遅筆堂文庫堂則」です。『遅筆堂』とは「遅筆でも良い作品を書きたい」という井上ひさしの号で、それをそのまま、文庫の名称に冠しています。

遅筆堂文庫は井上ひさしから寄贈された蔵書7万冊をもとに川西町が開設した図書館です。1994(平成6)年には、遅筆堂文庫を核に、劇場と川西町立図書館を併設した複合文化施設「川西町フレンドリープラザ」が完成しました。開設以降も井上ひさしからの寄贈は続き、資料22万点を収蔵しています。2008(平成20)年には、山形市の洋菓子販売(株)シベール本社敷地内に分館(シベールアリーナ&遅筆堂文庫山形館)が開設され、川西町の「遅筆堂文庫」から約3万冊の蔵書を移動させ展示しており、閲覧することができます。

コラム 25

ひょっこりひょうたん島

『ひょっこりひょうたん島』とは、NHK総合テレビで放送された人形劇です。(1964.4.6-1969.4.4)

個性豊かなキャラクターたちがミュージカル形式で笑いと風刺、冒険の物語を繰り広げ、本放送当時子どもたちの多大な人気を得ました。この番組で歌われた印象的な歌も含めて、NHK人形劇の代表的作品の一つとして数えられています。



©井上ひさし/山元護久 ひとみ座 NEP21
人形デザイン/片岡昌



Here are two more writers who loved their home, Yamagata:

The first is Fujisawa Shuhei. He wrote many stories describing the joy and sadness of ordinary people and lower class samurai in the Edo period. *Tasogare Seibei* (The Twilight Samurai) and several of his other works have been made into films and are popular among many people.

The second is Inoue Hisashi. He was writer and playwright born in Kawanishi Town. In Kawanishi Town and in Yamagata City there are libraries called “*Chihitsudo Bunko*,” or “libraries of a slow but good writer,” full of books donated by him. Inoue is also known as the author of *Hyokkori Hyotan-jima*, which is one of the main works of the NHK puppet play programs.



新庄市鳥越八幡神社内土舞台上で公演された朗読劇「土に叫ぶ人」



松田甚次郎



全国から集まった最上協働村塾の塾生



松田甚次郎石碑と胸像（鳥越八幡神社境内）

3 地域とともに 生きた人

コラム 26

宮澤賢治名作選

～賢治を有名にした甚次郎～

宮澤賢治の没後、『宮澤賢治全集』（全3巻）が1934～35（昭和9～10）年に出版・発行されましたが、発行部数が少なかったことから間もなく絶版となり、一部の愛好家に読まれたに過ぎませんでした。その後、1939（昭和14）年3月、『土に叫ぶ』のベストセラー作家松田甚次郎が編者となり、『宮澤賢治名作選』が出版・発行されると、間もなく文部省推薦図書となり、戦時下の貧しい中、しかも当時3円（当時の10kgの米価相当）とかなり高価だったにも関わらず、この本は飛ぶように売れました。また、初版発行から4年も経たないうちに第11刷まで印刷されました。



名作選の後書きには、多くの方々に宮澤賢治先生の遺作に触れてもらい、芸術家や宗教家、また科学者でもあり、貧農救済に生涯を捧げた聖農としての先生の姿を通じて、芸術や宗教、農業を見直してもらいたいとした甚次郎の願いが込められています。

この『宮澤賢治名作選』こそ、宮澤賢治の名や作品、賢治の思想を全国に広く知らしめる役割を果たしたと言っても過言ではありません。

(1) 「土に叫ぶ」村おこしの先駆者 松田甚次郎

松田甚次郎（1909～1943年）は稲舟村鳥越（現新庄市鳥越）の旧家に生まれました。甚次郎に転機が訪れたのは、盛岡高等農林学校の卒業間近に、花巻の宮澤賢治を訪ねた時です。賢治は、真に農民を豊かにするためには、まず自分が「本当の百姓」になり、農民と直接科学や文化を共有しなければならないと考え、教職を辞し、農耕生活に入っていました。

学校で学んだ知識を生かし、合理的な農業を目指す甚次郎に、賢治は、「一つ 小作人たれ。二つ、農村劇をやれ。」と諭します。甚次郎はそれを生涯の実践課題としました。

甚次郎は村に帰ると、父甚五郎に六反分の田を借り、小作人の生活に入るかたわら、村の青年を集め、鳥越倶楽部を結成し、演劇活動を始めます。鳥越八幡神社境内に造られた「土舞台」を会場の中心とした公演は36回も行われました。

一方、甚次郎は、農業恐慌により疲弊していく村の生活を守るため、自然堆肥による有機農業の実践、麴・醤油・味噌などの調味料の自家製造など、自給自足的な農業経営を実践するとともに、村に消費組合などを組織し、地下足袋や軍手など自給できないものを共同で安く購入できるようにしました。

1932（昭和7）年には、村に最上協働村塾を設立し、全国から集う塾生とともに農耕に励むとともに、農業経営について学び合い、農村更正を志す農業青年の育成にあたりました。

1933（昭和8）年には、それまでの実践活動が認められ、有栖川宮記念厚生資金を受け、これをきっかけに、農繁期の相互扶助実践の場となり、県で第1号のモデルケースとなった“鳥越隣保館”を建設します。ここでは、農繁期の託児所が開設されたほか、栄養改善の講習会や母の会、敬老会も開催され、農村婦人の保護にも暖かい手を差し伸べました。

1938（昭和13）年、賢治と約束した10年間の実践記録をまとめた『土に叫ぶ』を刊行すると、これがただちに、東京有楽座で劇化上映されたこともあり、甚次郎の名は一躍全国に知れ渡ることになりました。



昭和13年ベストセラー
松田甚次郎「土に叫ぶ」



大井沢診療所で保健文化賞を手にする志田周子医師 1959(昭和34)年



旧大井沢診療所 奥に見えるのが月山(平成27年6月18日 山形新聞)



大井沢小学校での検診



地域住民とふれあう志田周子



西川町大井沢地区

(2) 僻地医療に生涯をかけた女医 志田周子

山形県西川町大井沢は月山と朝日連峰の中間にある山村で、毎年3m以上もの雪でうずまり、その雪が消えるのは5月も末のことです。当時(昭和初期)は、自家用車も少なく「陸の孤島」とさえ言われ、医者もいませんでした。

そんな、医者にも診てもらえないで死んでしまう村人の多いことがくやしいと思っていた志田周子(1910~1962年)の父(当時大井沢小学校校長)は、東京女子医学専門学校(現在の東京女子医科大学)の付属病院に勤務していた周子に、「3年だけでいい、大井沢へ、村の人のために帰ってきてくれ」と、頼みました。その年、1935(昭和10)年6月、周子24歳の時に村へ帰る決心をしました。

約束の3年までもう半年となった1938(昭和13)年の冬、母が病気でなくなりました。医者である自分が母の病気も見極められず救えなかったことを悔やみました。また、残された幼い弟や妹たちを哀れに思い、大井沢に残り、医者として弟たちの母代わりとして生きていこうと決意しました。周子27歳の時でした。

それから、お腹をこわして死ぬ子ども、生まれて間もない赤ちゃんの死亡、働き過ぎで亡くなる若いお母さんなど、山村に多い病気が大井沢から年ごとに減っていきました。

1959(昭和34)年9月、全国保健文化賞の贈呈式が、東京第一生命ホールで行われ、志田周子女医が表彰されました。質素な黒のスーツ姿の周子は、人一倍カメラマンのフラッシュに輝いていました。

コラム 27

映画「いしゃ先生」

2015.11.7 志田周子銀幕デビュー

2010(平成22)年6月、志田周子生誕100周年を契機に、『やまがたの宝「志田周子」資源活用化実行委員会』が設立しました。

その後、本委員会は、2012(平成24)年2月、これまでの活動経過、実績を踏まえるとともに、改めて、民間主体による映画制作を目指していくことを確認し、『志田周子の生涯を銀幕に甦らせる会』に引き継がれました。制作費の捻出で多数の有志が募金に応じ、ボランティアとしても支えていきました。また、多数の県民がエキストラとしても出演しました。多くの人たちの賛同と協力を得て、2015(平成27)年11月7日、志田周子が山形の地で銀幕デビューしました。

西川町大井沢の冬の厳しい自然、貧しい人々の暮らしの中で懸命に生きる人々、志田周子の医師としての生き方とともに、月山や寒河江川、田園地帯の中で咲き誇る満開の桜など、山形の自然美が輝くように描かれました。

2016(平成28)年1月9日より全国で上映されました。



In Yamagata, there are some who dedicate their entire lives to the benefit of their communities.

Matsuda Jinjiro received guidance from Miyazawa Kenji and became a *kosaku-nin* (tenant farmer) in order to live as a true farmer. He also started a drama group for young people in his village. They built a clay stage and gave performances to show their way of living. He wrote a record of his practice in *Tsuchi ni Sakebu*, which became a best-seller.

Shida Chikako dedicated her whole life as a doctor to caring for people in the mountain community of Oisawa, Nishikawa Town. She saved many sick people who were suffering because they could not get medical care. On November 7, 2015, she made her on-screen debut in Yamagata with the film *Isha Sensei*.